

13 3年生(卒業生)寄稿

部長 池上 貴一(令和3年度後期～令和4年度前期)

まず初めに、平成29年那須雪崩事故において亡くなられた先輩7名、教員1名へ哀悼の意を表します。当時私は、小学6年生で、サイレンを鳴らしたたくさんの緊急車両が那須方面へ走っていったことや、インターネット上の速報でも多くの報道各社が雪崩について取り上げていたことを記憶しています。二度と同じような事故が起こらないこと、そしてこの事故が後世に語り継がれていくことを、一山岳部員として切に願います。

私は、新型コロナウイルスが蔓延し始めた令和2年4月に大高へ入学しました。幼いころからスキーを通して山に親しんでいた私にとって、山岳部以外に入部をする選択肢は眼中にありませんでした。さらに当時所属していた1年3組の担任をされていた高梨先生が顧問を務めていらっしゃることに信頼感もあり、山岳部へ入部することを決意しました。

入部したことへ安堵したのも束の間、私たち山岳部はコロナをきっかけに変革期に差し掛かりました。具体的には2つの課題に直面しました。

まず1つ目の課題は、コロナ禍でどのように活動していくべきかについてです。パーティーの人数制限ができたり、県内での日帰り登山のみが可能となったりしました。そのような中でも活動できるように高梨先生をはじめとする顧問の先生方は、計画を立て、安全に活動を行わせてくださいました。月に1、2回、私たちが登山に関する知識や技術を学べるようにと、那須を中心にたくさんの山に登りました。それぞれの山やルートにたくさんの思い出があります。登頂寸前は晴れていたのに登頂と同時に大雨に当たったことや、三斗小屋温泉で温泉につかったこと、楽しみに準備したたこ焼きが火力不足で作れなかった後輩がいたことなど、ここには書ききれないほどあります。コロナによりたくさんの制限がありましたが、活動できる時間が少ない分、とても濃い思い出を残すことができました。

そして、もう一つの課題は山岳部が活動する意義についてです。この課題については私自身も本当に悩みました。

「大高山岳部って…あの事故に遭った?」、「まだ活動してたんですか!?!」…

山ですれ違う、山をこよなく愛する方々との会話の中で、このような言葉を頂いたことが何度かあります。3年生になってから、このようなお声かけを頂くことは減りましたが、多くの方々には心配や弔いの意味を込めてかけてくださっているでしょう。事故があったことを承知の上で入部した私ですが、他の部活動のように「好きだから」という理由だけで活動はできない、と、この言葉たちに気付かされました。一体どうすればいいのだろうか、何ができるのだろうか。私は、部長という立場を務め始めてから改めて、真剣に考えるようになりました。事故後の山岳部を引き継いだ私たちには、起こった事故の過失・責任について話す義務も権利も当然ありませんし、それは私たちの仕事ではありません。そのような中で、私は、どの立場の人であれ、ある同じ思いを抱いていることに気づきました。それは、事故の「再発・風化防止」です。このことから、私は、事故があったことを後世に受け継いでいくことこそが、私たち後輩が、山岳部として活動をする意義の1つではないかと考えるようになりました。確かに、命を落とすリスクは他の部活動よりも高く、事故を起こしてまで活動し続ける必要はないというご意見も理解できます。仮に私も大切な人を亡くしたら、なおさらそう考えるでしょう。ですが、誰もが、事故は「起きてほしくない」、事故を「忘れてはいけない」と思うのは間違いのないはずで、誰かが、この事故を受け継いでいくべきだと思います。もちろん、慰霊祭を行うことも慰霊碑を建てることも風化防止に大いに繋がるとは思います。遠い将来、慰霊祭はいつか途絶えてしまうかもしれないですし、慰霊碑は慰霊碑を目で見た人しか事故について知ることはできません。しかし、私たち大高山岳部が存続すれば、存続し続ける限り、事故は後輩を含めた山をこよなく愛する人々のみならず、その他の多くの人々に受け継がれ、事故の風化防止や再発防止へつながるのではないのでしょうか。先述の通り、私が3年生になってから、事故について話す人はとても減ったと身をもって感じます。そうなった今、だからこそ、山岳部が先頭に立ち、安全な登山について啓発すべきだと考えます。

2つの大きな課題を乗り越えたところで、私の大高山岳部でのキャリアは終了しましたが、得られた達

成感は大きく、また本当に素晴らしい経験をすることができたと感じます。また新たな課題に直面することがあると思いますが、自慢の後輩たちならきっと乗り越えられると信じています。そして、私自身も山岳部で得た経験を活かし、新たな道でも精進したいと思います。

ここまで大変長々と書かせていただきましたが、これらは活動の本当にごく一部です。他にも、山でのゴミ拾いや山小屋への歩荷など小さなことではありますが、社会貢献をすることもできました。街にいても山にいても、感謝されたり、笑顔になってもらえたりすることは非常に嬉しいものです。これからの私生活でも続けたいと思います。最後になりますが、このように主体的に活動できたのは、高梨先生をはじめとする顧問の先生方のお陰です。そしてさらに、充実した日々を過ごせたのは、3年間を共に過ごした磯良翼君を始めとする部員全員、OBの皆様、保護者の皆様など、活動にご理解をしてくださる皆様のお陰だとも考えています。昨日の当たり前が今日の当たり前ではなくなるなど、日々変化し続ける社会ではありますが、新型コロナウイルスへの制限が緩和されつつある社会と同様に、大高山岳部がこれからも良い方向に進み、発展することを祈っています。

本当に素晴らしい3年間をありがとうございました。

副部長 磯 良翼(令和3年度後期～令和4年度前期)

山岳部で過ごした二年余りの間を振り返ってみると、本当に充実した日々だったと感じる。日頃のトレーニングや山行、講習会など、どの活動もやりがいがあり、思い出もたくさん残った。ところが、新型コロナウイルスの流行という異例の事態によって、さまざまな活動が制限されたり、中止されたりと予定通りに活動できないこともあった。しかし周囲の方々の支えもあり、さまざまな山に登ることができた。私が山岳部として充実した活動をすることができたのは、先生方をはじめ OBの方々、そして保護者の皆様の協力があったからだと思う。本当に感謝したい。後輩たちも、日々感謝の気持ちを忘れずに活動してほしい。